

フォーリズムの根拠

石村 実

戦後の美術において重要な批評家の名前をあげるとき、クレメント・グリーンバーグの名前は、はずせないだろう。アメリカ抽象表現主義絵画において指導的な役割を果たした彼の批評は、厳格にモダニズムの理論を追求したものだ。グリーンバーグはモダニズムをカントの自己批判の思想に発すると考え、それを自らの美術批評の中で推し進めた。その厳格な姿勢のゆえに、彼の美術批評はフォーリズム批評として位置付けられる。

例えば、絵画という表現様式を自己批判的に考えていくなれば、その特性は絵画が平面である、という一点に集約される。だからモダニズムの絵画は、平面性の追求へと向かったのだ、とグリーンバーグは考える。これは、彼のフォーリズム批評の根拠となるもの、と言っていいだろう。その論理は明確で、一見したところ曖昧なところがない。

しかし、抽象表現主義の絵画が広く認められ、その後、完全な平面性に至るミニマル・アートの絵画が現れた時、彼はそれに対し、否定的であった。新しい絵画の動向として認知はするけれども、積極的に評価はしなかった。そして、モダニズムの絵画は平面性の追求へと向かう、という自らの論理について、それは絵画芸術をわかり易く説明するための極端な言い方なのであって、完全な平面性へと向かうということではない、と弁明に近い解説さえしている。

この、「矛盾」と言ってもよいグリーンバーグの、絵画の平面性をめぐる論議は、彼が理論の根拠としたカントの「美学」と、現実の「美術批評」との間で、構造的に生じたものだ、と考えられる。普遍的な言葉で「美」について語ろうとする「美学」と、

実際の芸術作品について語ろうとする「美術批評」とは、はじめから矛盾する要素を孕んでいるのである。グリーンバーグの美術批評の魅力は、その矛盾を超えて、普遍的な論理で「美術批評」を語ろうとした点にあるが、抽象表現主義絵画において、みごとな成果をあげたその論理も、ミニマル・アート以降の時代に対しては、次第にその射程を外して行ってしまったようだ。

しかし、それはともかく、私が興味深く思うのは、ミニマル・アートの絵画が現れたとき、グリーンバーグが、絵画の完全な平面性を否定した点にある。彼はそのとき、絵画という表現様式にとって、絵画的なイリュージョンが不可欠である事を、あらためて認識したことだろう。

もちろん、ここで言う絵画的なイリュージョンとは、ルネッサンス以来の伝統的な遠近法によるイリュージョンではない。例えば、抽象表現主義が実践したような、奥行きのない、しかし広がりのある、というような広義な意味での、絵画的なイリュージョンである。

もしもグリーンバーグの、フォーリズム批評の根拠を、絵画の平面性にではなく、絵画的なイリュージョンにおいてみたらどうなるだろうか。つまり、絵画は究極のところ、絵画的なイリュージョンを有するがゆえに、絵画として認識されるのだ、というふうに読みかえてみるのである。

その時、平面性の追求として完結してしまっただけに見えた絵画が、再び新鮮なものとして現れてこないだろうか。私たちの視覚に映ずる世界が、広義な意味での絵画的イリュージョンの中で、いまだに表現されえずに佇んでいるとしたら、どうだろう。例えば、私の視覚の断片が、絵画表現という一枚の被膜の上に、いまゆっくりと立ち現れてくるとしたら、それはどのような様相をしているのだろうか。 (04.5.3)